ローマ文明の世界史的意義・再説（一）

高田邦彦

序論

十九世紀の中頃、ドイツの歴史家レオポルト＝ランケ(Leopold v. Ranke)は、ローマ帝国[1]の世界史的意義を講評して、次のように述べた。「一切の古代史は、いわばひとつの湖に注ぐ流れとなってローマ史の中に注ぎ、近代史の全体は、ローマ史の中から再び流れ出るということができる。私は敢えて、もしローマ人が居なかったならば、歴史の全体が無価値なものとなっていたであろうと言いたい。[2]」ヨーロッパの碩学の牢乎として抜き難いこの独善的評言に接すると、二十世紀末葉の東洋人であるわれわれは、呆気にとられる外はない。まず第一に、一切の古代史はローマ

（1）ランケが使用する「ローマ帝国」という概念は、単なる政治的概念を超えて、政治・社会・文化的統一体としての「ローマ文明」を指している。

（2）Ranke, Leopold v.; Über die Epochen der neueren Geschichte. 1854.（邦訳、『世界史概観—近世史の諸時代』、鈴木成高・相原信作訳、岩波文庫、一九四一年。引用はこの訳によった。）

史の中に流れ込んでいないし、第二に、近代史の全体はローマ史から流れ出ていないし、そして第三に、ローマ人が居なくても世界史の全体は無価値なものとならなかったはずだからである。

その理由をいま少し具体的に述べると、第一に、ローマ帝国に先立つメソポタミア・エジプト・ペルシアなどの古代オリエント史も、中国・インドの古代史も、その大部分はローマ帝国に継承されなかった。ローマ帝国が古代から継受したものは、ほとんどがギリシア＝ヘレニズム世界からの精神文化（哲学・歴史・文学・美術・政治思想・弁論術など）であって、古代オリエントの方から継受したものは、強いて挙げるならば、エジプト・ペルシアなどの密儀宗教（イシス崇拝とミトラ教）とバビロニア建築[3]のアーチ（多分エトルスキー人を通して）ぐらいのものであったろう。ただし地中海東岸地方からは、ポイニキアのアルファベットとユダヤのキリスト教を（いずれもギリシア語を通して）採用したが、これが西欧の近世史に絶大な影響を及ぼしたため、ランケの史眼はこれに幻惑されて、ローマ帝国の世界史的意義を過大に評価したのであろうと推量される。

第二に、ランケはローマ帝国が近代に伝えた産物として、「㈠普遍的な世界文学、㈡ローマ法を普遍的な法にまで作り上げたこと、㈢君主制の体制を作り上げ、これと関連して周到な行政組織を作ったこと、㈣キリスト教会を支配的地位にまで高めたこと[4]」の四項目を数え上げているが、これらはいずれも西欧近代史に対する貢献であって、世界の近代史に対する貢献とは言い難い。また仮りに対象を西欧近代に限定してみても、世界文明に対する西欧近代の最大の貢献物とも言うべき科学技術は、ローマ文明に由来するものではなく、アラビア・ペルシアのイスラーム文明によって触発されたものであった。

そして第三に、（これが何よりも重要なことであるが、）ローマ帝国が旧大陸の西部において権勢をほしいままにしていたころ、その東部には人口においても面積においてもローマ帝国を凌駕する漢帝国[5]の中国文明が既に二百年も前

から繁栄しており、中部にはインド文明やパルティアの（ペルシア）文明が健在であって、たとえローマ人が居なくても世界歴史は十分な存在価値を有したに違いないと考えられる。要するに世界史の視点から歴史を記述すると豪語したランケの意識内には、ただ西洋のみが存在し、当時の世界歴史の三分の二に当たる東洋と中洋とが欠落していた。ローマ文明についてのかれの評言は、十九世紀の西欧知識人の世界歴史に関する知見が、われわれの想像以上に貧弱なものであったことを示す一例であると言うことができよう。

このような西欧知識人の独善的意識は、二十世紀になってもあまり改善されていない。例えば今世紀初頭のスペインの哲学者オルテガ＝イ＝ガセ(Ortega y Gasset)は、代表作のひとつである『無脊椎のエスパーニャ』の冒頭で、次のように述べている。「ローマ民族は、その歴史がわれわれに知られている数多くの民族の中にあっても、他に例のないケースである。つまりローマ民族はわれわれが見守る前でその生の周期全体を展開してみせてくれる唯一の民族なのである。われわれはその誕生と消滅とに立ち合うことができる。[6]」実はかれがこの一文を草していた一九二〇年ご

（3）Kleine Pauly（『パウリ小事典』）の'arcus'項によれば、アーチは紀元前三世紀にギリシアにおいて出現したことになっているが、ドイツのRobert Koldeweyは今世紀の初め、Babylonの遺跡（前六世紀のNebuchadnezzar王の築造物）の発掘において、「空中庭園」と覚しき構築物のアーチを発見している。さらにイギリスのLeonard Wooleyは、一九二〇年代のUrの発掘のあと、前二四世紀の王墓の屋根にアーチが使われていたと、報告している。

（4）ランケの前掲書、第一節。これらは「ローマ文明」の産物という方がふさわしい。

（5）

		推定人口	推定面積
漢帝国	（西紀二年）	五、九六〇万人	五六〇万平方粁
ローマ帝国	（〃十四年）	五、四〇〇万人	三三〇万平方粁

（6）Ortega y Gasset, Jose; España invertebrada. 1921.（邦訳、『無脊椎のスペイン』桑名一博訳、オルテガ著作集第二巻所収、白水社、一九六九年。引用は桑名氏の訳文による。（一部変更、）傍点は筆者。）

ろには、ランケの時代と異なって、すでに古代オリエント文明に関する考古学的発掘と言語学的研究が著しく進み、エジプト王国を初めバビロニア王国・アッシリア王国・ペルシア王国などが、その誕生から消滅までの全容を明らかにしていたのである。しかしオルテガはこの事実には目も呉れず、ひたすらローマ文明の運命のみを見つめて、その論述を進めた。「われわれの目は、粗野な原初ローマが、世界全域にわたってはなばなしく発展していく後を追うこともできれば、その後で、巨大なだけにいっそう哀れな廃墟と化すのを目撃することもできる。」ここには西欧知識人のローマ文明に対する格別な思い入れが披瀝されているが、われわれ東洋人は、原初ローマが発展して行った先は地中海世界であって世界全域でないことも、また地中海世界の東方にはるかに広大な中洋や東洋の世界が拡がって、ローマに劣らぬ高度の文明が栄えていたことも、よくわきまえているので、このような誤解に満ちた表現に接すると、少なからぬ違和感を覚える。

このような偏見は、アーノルド＝ジョーゼフ＝トインビー（Arnold Joseph Toynbee）[7]やジョーゼフ＝ニーダム（Joseph Needham）[8]を生んだイギリスとか、画期的な世界美術全集『造形の世界』[9]を発刊したフランスとかでは、知識人の間で徐々に改められつつあるように思われるが、その他の国々では依然として西欧のみが世界であるかのような古い通念がまかり通っている。たとえばイタリアでは一九八四年に『美術大百科事典』[10]（全三巻）が発行され、ドイツでは一九八八年から今年にかけて『美術事典』[11]（全十二巻）の大叢書が刊行されたが、両者とも記載事項の九〇パーセント以上が西洋に偏っており、その他の地域に関する記述は、日本人の常識から見て呆れるほど貧弱なものである。このような美術事典を利用する人々は、ヨーロッパ以外に美術は存在しないと確信するだろう。

ローマ学の分野においても事情は異らない。もともと十二世紀におけるラテン古典の復興以後、キリスト教とローマ法によって育成練磨されてきた西欧知識人にとっては、それらの文化財を提供したローマ文明は絶えず千鈞の重み

を以って迫る存在であって、今日といえどもその重要性を減じていない。例えばいま（西）ドイツで、一九七二年以来、古代史学者ヨーゼフ＝フォークト(Joseph Vogt)の七五歳の誕生日を記念して、『ローマ世界の興隆と衰退』[12]という標題の論文集が編纂・刊行されつつあるが、独英仏伊の四カ国語で書かれた一冊約千頁の論文集が、当初の計画であった十九冊を超えて次々に続刊され、現在五〇冊を上回ってなお果てる気配がない。たとえローマ世界が西欧知識人の振り仰ぐべき古典古代であるとしても、われわれ日本人が同様の古典古代である中国やインド世界について、これほど膨大な論文集を編むことは想像もできまい。しかしわれわれは、ローマ世界に傾注するかれらの異常な熱意に一驚を喫しながらも、かれらがせめてこの熱意の一部なりとも東洋や中洋の研究に注ぐならば、世界文明に対する西欧中心的な独善性と偏頗な知識は大幅に改善されるであろうにという思いを禁じ得ない。現代世界の三分の二を占める非西洋の人々にとっては、中国・インドの古代文明やイスラーム文明こそが関心の対象であって、ローマ文明など

（7）畢生の大著『歴史の研究』"A Study of History"（全十二巻）は、一九三四年から一九六一年にかけて刊行された。
（8）『中国における科学と文明』"Science and Civilization in China"（全七巻）を、一九五四年以来刊行しつつある。
（9）L'Univers des Formes. Editions Gallimard. 1960 ～ 1987.（全三〇巻）ヨーロッパ以外の世界の美術にも力を注いでいる。（例えば、イラン、黒アフリカ、南太平洋など。）
（10）Grande Enciclopedia dell'Arte. Fabbri e Pompiani. 1984.（邦訳、『世界美術大事典』、全六巻、小学館、一九八八―九〇年。）
（11）Lexikon der Kunst. Malerei, Architektur, Bildhauerkunst. Herder Verlag GmbH. Freiburg in Breisgau. Bde 12. 1988 ～ 90.
（12）Aufstieg und Niedergang der römischen Welt. Geschichte und Kultur Roms im Spiegel der neueren Forschung. Hrsg. von H. Temporini und W. Haase. 1972 ～. Walter de Gruyter, Berlin.

何の興味も引かぬ他人事に過ぎないであろうから。

それではいま西欧以外の人々にとって、ローマ文明は何らかの意義を持ち得るであろうか。もちろん世界のいずれの文明も、それぞれが生み出した個性的な遺産によって世界文明の内容全体を富ませてきており、ローマ文明も中国文明・インド文明・イスラーム文明などと並んで世界文明に絶大な寄与を行なった主要文明であることは言うまでもない。先に引用した文章においてランケが枚挙した四項目、すなわち㈠普遍的な世界文学、㈡普遍的なローマ法、㈢君主制度と行政組織、㈣公同的なキリスト教会は、世界文明に対するローマ文明の紛う方ない貢献であると言える。しかしこれらの個々の遺産調査はローマ学の諸部門[13]に委ねられた専攻対象であって、比較文明学のそれではない。比較文明学としてローマ文明を取扱うには、その文明の個別的具体的内容を捨象して、文明の型(Typus)を抽出し、その型を他の諸文明の型と比較することによって、時間・空間の枠を超えたローマ文明の世界的存在意義を明らかにしなければならない。

従来ローマ文明については、「盛衰原因論」というローマ学の一分枝とも称すべき特異な論題があって、西欧世界の文人や学者が数百年に亘ってこの論題を扱ってきた。そして二十世紀の現代になってもなおこの論議は活潑さを失わず、一時的にもせよ世界に覇を唱えた大帝国の運命は（スペインもイギリスもアメリカ合衆国も）、つねにローマ帝国の運命と引き較べて検討され、その行く末を予言される。驚いたことに、最近経済力によって世界を制覇したと言われる日本人までも、あるアメリカ人学者[14]によって、ローマ人になぞらえられているのである。このようにローマ文明の運命が、滅亡後千数百年を経てもなお人々の関心を引くとするならば、それはローマ文明が他の諸文明の持たぬ特異な範型を有するからに相違ない。

こういう見方に立って、本稿はまず（第一章）、ローマ文明の形態論的(typologisch)特色を明らかにする。次いで

（第二章）、その特異性の故に論じられた「盛衰原因論」の歴史的経過について概観する。そして（第三章）、原因のあれこれについて論じつつ、他文明との比較および現代の諸文明批判を行なう、というのが本稿の構想である。

第一章　ローマ文明の形態論的特色

ローマ文明の形態論的特色を究明してみると、大雑把に言って二つあると考えられる。そのひとつの特色は、ローマ文明の成長の仕方にある。ローマ文明は、イタリア半島中部、テーヴェレ川下流の要衝に築かれた一城邑に過ぎないローマ市（Urbs Roma）が、次第に周辺の都市共同体を征服・合併することによって成長し、七百年の歳月をかけて遂に地中海周辺地域のあらゆる都市国家を個別的盟約によって結合した異色の文明である。従ってその中心には、終始一貫してローマ市という核が扇のかなめのように存在し、ローマ市の成長がそのままローマ文明の成長を意味した。他の諸文明では決して見られぬこのような現象が、なぜローマ文明においてのみ可能であったかといえば、それはローマ市民の（特に支配者層であるローマ貴族の）巧妙な対外政策によるものと考えられる。すなわちローマ貴族は、伝承によると早くも前七世紀に、近郊の都市アルバ＝ロンガ（Alba Longa）を征服した際、その町の貴族をローマ貴族として受容したと言われるが、前六世紀末（共和政の成立）以後は、征服・支配した他の都市国家の支配者層

（13）すなわち、ローマ思想、ローマ文学、ローマ史、ローマ法、ローマ美術、ローマ考古学、など。

（14）ボーイ＝デ＝メンテ著、『日本化するアメリカ』、第一章、「新しいローマ人」、蓬田利文・天川由記子訳、中経出版、一九八六年。

を懲罰も根絶もせず、寛大にもこれにローマ市民権を賦与して自己の支配体制内に編入し、これを利用してその都市を平穏裡に統治する方策を執った。この方策は、ローマの支配領域が近隣のラティウム地方からイタリア半島全域へ拡大しても（前三世紀前半）、さらに海外の広大な諸属州へ拡大しても（前一世紀後半）、変ることなく踏襲され、アウグストゥス以後の元首政期には、この体制が地中海世界的規模で確立して行った。しかもローマの貴族層は被征服都市の支配者層に大所有地（latifundium）を賦与して経済的利益をも収得させ、その上かれらと庇護関係（clientela）と呼ばれる人格的信頼関係をも打ち立て、いわばかれらと共同統治の形で帝国内の被治者層に臨んだ。こうして地中海世界（ローマ文明の領域）全体は、ローマ市を家父長とするひとつの大きな家のような存在となった。従ってこの家は、家父長の繁栄と共に繁栄し、家父長の没落と共に没落して行くことになる。

ところで、このように原初ローマが中核となって成長したという通念に、異論を唱えたのは、前にも引用したオルテガ＝イ＝ガセである。かれは原初ローマが二つのローマ（山のローマと丘のローマ）、ラティウム連合、中部イタリア統一体、植民地帝国へと段階的に上昇したことを述べ、この図式だけで、歴史的統合が原初ローマという中核の拡大ではなく、既存の多くの社会集団を新しい機構へ再編成することだとわかるという。「原初の中核は、次第に隷属させて行く諸民族を飲みこみもしなければ、またそれら諸民族が統合前に持っていたそれぞれの生活集団の特徴を抹殺することもない。…統合の原初の中核であるローマ自体は、巨大な機構のこれまた別の一部分にしか過ぎず、ただ結集作用の主体であるということで有利な位置を占めたのである」[15]という。なるほど政治学の面から各々の都市国家の内部機構を微視的に分析すれば、どの都市国家もそれぞれ独自の生活集団であって、ローマ市の単なる模写でもなければ延長でもない。しかしローマ帝国の成立の仕方を、比較文明学の立場から巨視的に眺めれば、これは明らかに単核成長型の文明であると言えよう。このことは、ローマ文明と他の主要文明の成長の仕方を比較してみれば、直ちに

了解できることである。

すなわち、ローマ文明に先立つ四大灌漑文明（メソポタミア・エジプト・インド・中国）も、ローマと同時代のシリア・ギリシア両文明も、後代に出現するイスラーム・西欧両文明も、すべて複数の都市共同体の離合集散を経て成長し、次いで複数の諸国家の盛衰興亡のうちに存続したのであって、そこには複数の核が存在し、文明の中心はたびたび移動した。メソポタミア文明にはシュメール諸都市、古バビロニア・アッシリア・新バビロニア諸王国があり、エジプト文明には古王国・中王国・新王国・プトレマイオス朝があり、中国文明には殷・周・秦・漢などの諸王朝があり、インド文明にはマウルヤ・アーンドラ・クシャーナ・グプタなどの諸王朝があった。シリア文明にはポイニキア人の諸都市やイスラエル人の諸王国があり、ギリシア文明にはスパルタ・アテーナイ・テーバイなどの盟主国やマケドニア王国があった。要するにこれらは、多核交代型の文明であるということができる。

これに対しローマ文明のみは、徹頭徹尾、一都市国家ローマの膨脹によって成立したのであって、これは他に類例のない不思議な生い立ちの文明と言わねばならない。この不思議さに心打たれたからこそ、人々は早くから、なぜローマのみが興隆したのか、その原因を真剣に問い質し、それに納得の行く解答を与えようと努めたのであろう。早くも紀元前二世紀に、ギリシアの歴史家ポリュビオス（Πολύβιος）は、ローマ興隆の原因をその安定した混合政体にあると考えた。そして紀元後二世紀のギリシアの弁論家アイリオス＝アリステイデース（Αἴλιος Ἀριστείδης）はそれを諸民族支配の巧妙な技術にあると考え、四世紀のギリシア人史家アンミアーヌス＝マルケッリーヌス（Ammianus Marcellinus）はローマ人における美徳（勇気）と幸運との類い稀れな結合にあると考えた。これに対し他の文明にお

(15)　前掲書（『無脊椎のエスパーニャ』）第一部、第一章「分裂と統合」。引用は桑名一博氏の訳による。

いては、諸国家・諸民族の栄枯盛衰は世の常であった。だからこそ、古バビロニア王国が南北メソポタミアを統一しても、周王朝が華北の中原を制覇しても、マウルヤ王朝がインド亜大陸の大半を領有しても、その原因が何であるかをことごとしく問い詰める者はなかったのである。

さて、ローマ文明のいまひとつの形態論的特色は、その没落の仕方において認められる。およそローマ文明ほど、想像できる最も壮大な規模に到達しながら、無に等しい奈落にまで転落した文明はない。なるほど世界史上には、ローマ文明と同じように隆盛の絶頂から転落し滅亡した文明を、幾つも数え上げることができる。群小の周辺文明はさておいて主要文明のみを列挙してみても、ローマ以前ではメソポタミア・エジプト・ギリシアの諸文明があり、ローマ以後ではメソアメリカ・アンデスの両文明がある。しかしこれらの文明は質的には重要であっても、量的に（面積と人口から）見た場合、ローマ文明と比較して桁違いに規模が小さいのである。恐らくいずれも、面積にして五〇万平方粁から一〇〇万平方粁、人口にして五〇〇万人から一、〇〇〇万人程度であったろう。[16] 一方ローマ文明は（ローマ帝国の版図と完全に一致するが）、ほぼ絶頂に達した紀元一世紀の初頭に、三三〇万平方粁の面積と五、四〇〇万人の人口を覆う世界屈指の巨大文明であった。[17] 当時の世界にこれと比肩する文明を求めるならば、東洋の中国文明と中洋のインド文明があるのみで、中国文明の漢帝国は五六〇万平方粁の面積と六、〇〇〇万人の人口を擁し、[18] インド文明のマウルヤ王国は、（人口は不明だが）面積は三二〇万平方粁で、ローマ文明にほぼ匹敵していた。[19] 周知のようにフィリップ＝バグビー（Philip Bagby）は、世界の諸文明を「主要文明（Major Civilization）」と「周辺文明（Peripheral Civilization）」とに分類した。[20] 前者はそれ自体で存立して他文明に影響を及ぼす、持続性の長い文明であり、後者は主要文明に依存しながらも自らの命脈を保つ、持続性の短い文明である。しかしバグビーが枚挙した九つの主要文明のうち、中国文明・インド文明・古典文明（ローマ文明はその後半に当る）・近東文明（すなわちイスラー

ム文明）・西欧文明の五つは、その面積と人口において「巨大文明(Gigantic Civilization)」とも呼ぶべき壮大な規模を有している。なるほどそれは、単なる空間的物理的量の差に過ぎないかも知れないが、しかしあたかも巨大都市である東京と中都市である静岡や岡山を同じ水準で論ずることが不合理なように、文明の場合も空間的物理的量の規模がひと桁も違えば、その結果は質的差異に反映してくるのではなかろうか。

---

(16) これらの文明について、面積は歴史地図より簡単に測定できるが、人口は推定による他はない。エジプト文明は新王国末期（前四世紀）に三〇〇万人、プトレマイオス朝期に土地開発が大いに進んで、その末期（前一世紀）に八〇〇万人と言われる。ギリシア文明は最盛期（前五世紀後半）に三〇〇万人である。メソポタミア文明は不明だが、現在残っている都市の廃墟（テル）が一五〇程度であるから、一〇〇万人ぐらいだったろうか。メソアメリカ文明のアステカ王国とアンデス文明のインカ帝国は、共に滅亡時（十六世紀）に一、〇〇〇万人と推定されている。

(17) 面積は、もしローマ帝国の勢力範囲である地中海の水域を含めれば、六二〇万平方粁となる。人口は『世界歴史事典』（平凡社、一九五六年刊）の「人口」欄の表により、紀元十四年の数値と推定されるもの。（これは Beloch, K. J.; Bevölkerung der griechisch-römischen Welt. 1886. よりの引用。）エドワード＝ギボンは『ローマ帝国衰亡史』の第二章において、クラウディウス帝の治世（四一―五四年）の全人口を、市民総数六九四万人、家族を含めて二、二〇〇万人、奴隷を加えると一億二千万人と算定しているが、これは奴隷人口を過大評価した誤りである。

(18) 漢帝国の面積は『新撰歴史精図・東洋史の部』（帝国書院刊）の「前漢の疆域」図により筆者が推算したもの。人口は前漢の平帝の元始二年（西紀二年）の戸口調査の口数五九、五九四、九七八人による。

(19) マウルヤ王国の面積は、第三代アショーカ王（前三世紀）の支配領域を地図に描いて筆者が推定したもの。その支配領域は、王が残した摩崖詔勅と石柱法勅の発見場所による画定図に従った。人口は不明だが、アショーカ王がカリンガ地方を征服した戦争のみで、一〇万人の戦死者、十五万人の捕虜、数十万人の死者が出たとされており、この比例でガンガ川流域の人口稠密地帯を考慮に入れるならば、全人口は三、〇〇〇万人を下らなかったと推定される。

(20) Bagby, Philip; Culture and History. 1958.（邦訳、『文化と歴史』、山本新・堤彪訳、創文社、一九七六年。）

従来の文明論では、シュペングラー（Oswald Spengler）もトインビーももっぱら文明の質の相違のみを問題にしており、量の相違を問題にしなかったように思われる。文明の哲学的分析を行なったシュペングラーは、エジプト・バビロニア・メキシコの諸文明を上述の五巨大文明と同列に論じており、文明の系統付けを念頭に置いたトインビーは、シュメール・ミノア・商・ハティーなどの小規模文明を巨大文明と同格に取扱った。その不合理さを批判したバグビーは、文明の比重を考慮して、「主要文明」と「周辺文明」の区別を設けたが、しかしそのかれですら、分類基準として用いたのは主に質的基準であって、量的基準としては時間的持続性を問題としただけであった。われわれはここへ文明の空間的質量的基準を導入して、面積と人口の絶対値を考慮し、上述の五巨大文明を他の諸文明とは別格のものとして扱うことが必要ではなかろうか。そうすれば巨大文明であるローマ文明が、崩壊するに当たって途方もない運動量を伴ったことが、理解できるはずである。その運動量の大きさが、メソポタミア文明のアッシリア王国やエジプト文明のプトレマイオス王朝の滅亡と較べて、桁違いに深い感銘を後世の人々の心に呼び起こし、その没落の原因を繰り返し問わせることになったのではないかと考えられる。

ところで、ローマ文明以外の巨大文明の運命はどうであろうか。ローマ文明と同時代に存続した中国文明を見ると、紀元後二世紀の末から中国文明もローマ文明と同じく未開人の侵入と悪疫の流行によって衰退の兆しを見せ始め、三国・両晋・南北朝の長い混乱期を経験するが、ローマ文明が滅亡した七世紀[21]になると、逆に立ち直って、隋唐帝国の繁栄期を迎える。この唐帝国が滅亡した十世紀以後も、中国文明は遼・金・元・清などの北方異民族国家に支配されて盛衰浮沈を繰り返しはしたが、常に逆境の中から不死鳥のように甦って、二十世紀の現在に至るも滅亡の気配はない。またインド文明は、マウルヤ王朝のアショーカ王の治世（前三世紀）以後は南北分裂して統一王朝が生まれず、北部にはイラン系のクシャーナ王朝、南部にはドラヴィダ系のアーンドラ王朝が一時的に栄えたが、主要部のヒン

ドゥースターン平原は概して振るわなかった。ようやく四世紀から六世紀にかけて、インド人のグプタ王朝・ヴァルダナ王朝のもとに主要部の文化が発展してヒンドゥー教も確立したが、八世紀からイスラーム教徒の侵入が始まり、異民族支配が実に一千年続く。（トルコ系の奴隷王朝、アフガン系のロディー王朝、モンゴル系のムガール帝国など。）しかしインド文明自体はこの長い試煉に曝されながらもその特異性を執拗に維持し、今だに健在である。要するに中国文明とインド文明は、同一文明内の諸国家・諸民族の興亡を何度も経験しながら、長い目で見れば生産力は増大し人口は殖え、文化は向上し技術は進歩してきたのであって、これを目撃するわれわれ東洋人は、（主にギリシア＝ローマ文明を見詰めていたシュペングラーの悲観的印象とは正反対に、）巨大文明は永遠不滅である（ただし人類が滅亡しない限り）、という楽観的印象を受ける。これに対しローマ文明は、三世紀以後一途に衰退の道を辿り、遂に七世紀末に消滅してしまった。地中海世界の東北部の一隅では、なお八百年間東ローマ帝国が残存して、オリエント文明と結合したギリシア＝ローマ風文明（ビザンツ文明）を細々と維持するが、地中海西部における本来のローマ文明は決定的に没落したのであって、産業は衰退し人口は減少し、生活程度は低下し都市生活は放棄され、道路・河川の交通網は衰微し、そして学芸・技術は忘却されたのであった。それからおよそ四百年を経て、ゲルマン民族を中心とする西ヨーロッパ人が西欧文明の構築に取りかかったとき、かれらの目の前には、滅亡した唯一の巨大文明であるローマ文

(21) アンリ＝ピレンヌによれば、西ローマ帝国が滅亡したのちも、地中海文明はゲルマン諸部族に支えられてそのまま存続したが、六世紀末に野蛮なランゴバルド人が侵入してからイタリア半島は荒れ果て、七世紀に勃興したアラビア人によって地中海南岸を占拠されるに及んで、地中海文明は衰亡したということになる。いわゆる「ピレンヌ＝テーゼ」である。
Pirenne, Henri ; Mahomet et Charlemagne. 1937.（邦訳、『ヨーロッパ世界の誕生―マホメットとシャルルマーニュ』、増田四郎監修、中村宏・佐々木克巳訳、創文社、一九六〇年。）

明の廃墟があった。かれらの教養の源泉をなす古典古代ローマの、壮大な高みから悲惨な廃墟への失墜。それがかれらの心情を衝き動かして哀惜と懐旧の情をそそり、ローマ没落の原因をそこはかとなく思いめぐらさせたのであろう。たとえ没落しても落差の小さい文明や、たとえ巨大であっても没落しない文明は、その運命についてローマ文明ほど真剣に論じられることもなければ、将来を占うための範型とされることもない。

このように特殊な没落の運命を負わされたローマ文明については、早くも四、五世紀、ローマ帝国がまだ滅亡しない中に、その衰退の原因について考察した二人の文人が居た。ひとりは前述のギリシア人史家アンミアーヌス＝マルケッリーヌスであり、いまひとりはアフリカ生まれのラテン教父アウグスティーヌス（Augustinus）である。前者は衰退の原因をローマ人の奢侈と道徳的退廃にあると考え、後者はキリスト教護教家の立場から、神に背く「ローマの支配」そのものの中に原因があると考えた。これに引きかえ中国文明やインド文明では、王朝が倒れて次々に交代しても、それは君主の不徳により天命が革まったか、あるいは輪廻がめぐったかしただけのことであって、その現象は、原因探求にまで至らぬうちに、道徳論か運命論で簡単に処理されてしまったのである。

第二章　ローマ文明の盛衰原因論について[22]

ローマの興隆および衰退についての原因論は、前節にも簡単に触れておいた通り、ローマ文明の進行中であった二千年も前から時折り論じられており、その淵源は実に古いと言わねばならない。まず興隆原因論から見て行こう。

第一節　興隆原因論

ローマ興隆の原因を初めて理論的に考察したのは、前二世紀のギリシア人歴史家ポリュビオス（Πολυβίος）であると見られる。かれはギリシアのアカイア同盟の有力政治家であったが、前一六八年、マケドニア王国が第三次対ローマ戦争で敗北した際、アカイア同盟の一千人の人質のひとりとしてローマに連行され、取調べを受けた。しかしその優れた学識のゆえに、ローマの名将小スキーピオに寵遇され、かれに従ってヒスパーニアやアーフリカへ赴き、前一四六年カルターゴの滅亡を目撃したのち、国家の興亡に思いをめぐらして、当時の地中海世界の『歴史』[23]四〇巻を著わした。その書の第六巻において、かれはローマ興隆の原因を政治体制の視点より論究している。すなわち単一の政体には君主政（βασιλεία）、貴族政（ἀριστοκρατία）、民主政（δημοκρατία）の三種があるが、その各々が堕落形態である暴君政（μοναρχία）、寡頭政（ὀλιγαρχία）、衆愚政（ὀχλοκρατία）に移行し易く、そのため政体は君主政→暴君政→貴族政→寡頭政→民主政→衆愚政と変ったのち、また最初の君主政に戻ると説くのが、かれの有名な政体循環論（ἀνακύκλωσις τῶν πολιτειῶν）である。（この循環論はプラトーンの説に倣ったものであるが、かれの独創性は次の点にある。）ローマのみはしかし、この循環に陥らず、君主政（執政官、consul）、貴族政（元老院、senatus）、民主政（民会、populus）の正常形態の三者が、相互に制約しつつ安定した混合政体を形成しているために、今日の隆盛を招いたのである、と。実はローマの執政官は独裁に陥らぬため同僚官制と一年任期制という箍（たが）を嵌められていて君主政には

---

(22) 「ローマ文明の盛衰」が「ローマ国家（紀元前は共和国、紀元後は帝国）の盛衰」とほぼ一致することは、序論に述べた通りである。従ってここで「ローマ文明の盛衰」と称するのは、当時の文人によって、「ローマ国家の盛衰」として論じられているものであることを、まずお断わりしておきたい。

(23) Πολυβίος; Ἱστορίαι. 全四〇巻のうち、完全に現存するのは一巻から五巻まで。六巻以降は不完全な形で部分的に現存する。

程遠く、また民会は元老院との長い対立・抗争を経てかなりの国家権力を掌握していたが民主政には及びもなく、要するにローマ共和政は元老院の権威の優越する事実上の貴族政であったと見做されるので、ポリュビオスの観察通りには機能していなかった。しかし国家隆盛の原因を政治体制の特色に見出そうとするかれの洞察は、後代に対する卓抜な問題提起であった。

このほかにもポリュビオスは、ローマ興隆の原因として、その優れた軍隊組織を挙げた。すなわちローマ人の案出した中隊（manipulus）単位の戦闘隊形は、ローマに先んじて地中海の覇者となったギリシア人の密集方陣（φάλαγξ）より強力であったという。しかしこの戦術的長所は、政治制度の長所に比較して、部分的かつ一時的効果を有したに過ぎないと見られるので、文明論的にそれ程重視するわけには行くまい。それよりも重要なのは、これらの組織を効果的に運用したローマ人の人間的資質に対するかれの指摘である。すなわちローマ人の特質である忠誠・規律・敬虔（pietas）こそが、ローマ発展の秘鍵であるとかれは言う。この敬虔とは、家族内での忠実さ、制度に対する忠実さ、国家の宗教と伝統に対する忠実さを意味し、これこそはローマ市民を他の諸民族に優越させる特異な資質であった。ともあれローマ人の特質を原因のひとつに挙げた点においても、かれは後代の考察者の先駆的存在となった。

さてポリュビオスの混合政体論を原則的に踏襲したのが、かれよりほぼ一世紀後に活躍したローマの政治家兼思想家のキケロ（M. Tullius Cicero）である。かれは古今に比類のないその弁論術を駆使して前六三年の執政官にまで登りつめた偉材であるが、第一回三頭政治派の謀略によって国外追放の厄に会ったのち、自己の苦い経験を生かして『国家論』[24]の書を著わした。すなわち、かれはまずポリュビオスの政治理論に倣って、ローマ国制の優越を説いた。国家はその機能の執行者が一人であるか、少数の選良であるか、市民全体であるかによって、王政（regnum）、閥族政（civitas optimates）、民衆政（civitas popularis）という三種の政体に分かれるが、そのいずれも堕落形態に陥りがち

であるから、「三種の適度な混合型（moderatum et permixtum tribus）」が最も望ましい。この混合型こそローマ共和国の国制であって、そこでは政務官の権力（potestas）と元老院の権威（auctoritas）と民会の自由（libertas）が十分に発揮されてきた、という。しかしかれは、三頭政治派の権力支配のため混合政体の平衡が崩壊しつつある現実を見て、この平衡を回復すべき「指導者（rector）」または「調停者（moderator）」を構想した。それは徳と模範によって伝統的諸制度を擁護する偉大な個人であって、国家の後見人かつ調停者を務め、共和国を破滅から救い出すことを期待される人物であった。この指導者こそ共和国の第一人者、すなわち元首（princeps）であって、キケロの死後、アウグストゥスによって名目的に体現されることになる。要するにキケロの時代には、ポリュビオスの挙げた興隆原因（政治体制の特色）がすんなりと受け入れられない所まで事態が変化していたと言えよう。

こうして始まった元首政（すなわち帝政）が約二百年続いた二世紀の中頃、ローマの都を訪れたギリシア人の弁論家アイリオス＝アリステイデース（Αἴλιος Ἀριστείδης）は、ローマの支配者層を前にして、ローマを賞め称える幾つかの演説を行なった[25]。当時のローマは五賢帝のひとり、アントーニウス＝ピウスの統治下にあり、その支配領域は二代前のトライヤーヌス帝の時代より若干縮小されていたとはいえ、帝国は史上最高の繁栄と平和を享受していた。この時に当たり、恐らくローマ市民権を得ていたアリステイデースは、ローマ支配者層に迎合する内容を盛った演説を案出したと想定される。かれはまず、ポリュビオスの政体論に従ってローマの混合政体を賞讃し、それに若干の変更を加えて、政務官ではなく皇帝を国家の監督者として、より相応しい者と考えた。しかしかれはさらに一歩を進めて、

(24) Cicero, M. Tullius; De re publica. かれの政体論は、第一章と第二章において述べられている。

(25) Αἴλιος Ἀριστείδης; Ἐγκώμιον εἰς Ῥώμην. (A. D. 165)『ローマ頌詞』

恒久的な世界支配に失敗したギリシア人と比較しつつ、それに成功したローマ人の偉大さを、その巧妙適切な帝国支配の技術に見た。すなわちローマ人は、ローマ人以外の諸民族を排除することなく、その支配者層にローマ市民権を惜しみなく与えて、これを帝国支配の支柱とし、全世界をいわばひとつの大きな家・共通の祖国とすることによって、今日の繁栄と平和をもたらしたのだと説いた。この解釈は、阿諛迎合を抜きにして、ローマ帝国の政治的強大化の本質を、最も的確に見抜いた鋭い洞察と言わなければなるまい。

このような政治的考察と並行して、別の面よりする原因探求もあった。紀元前後のアウグストゥス帝時代に、ローマ人として最初の浩瀚なローマ史を書いたティトゥス＝リーウィウス（Titus Livius）[26]は、後世の史家から、事実の記述に専念して批評的精神を欠いたと評されるだけに、別段ローマ興隆の原因を考察してはいないが、しかしその歴史の最初の十巻を論評したニコッロ＝マキャヴェッリ（Nicollò Machiavelli）によると、どうやらリーウィウスはローマ人の覇権掌握の原因をかれらの美徳（virtù）によるよりも神々の恵んだ幸運（fortuna）によると考えていたらしいと、否定的に論断されている。祭政一致を信じていた共和政期のローマ人として、リーウィウスの解釈は当然と言えようが、しかしこの呪術的・宗教的・神秘的理由づけを、実証的な学問研究の分野に持ち込むわけには行くまい。かれに続く二世紀初頭のギリシア人伝記作家プルータルコス（Πλουτάρχος）も、その評論『ローマ人の幸運について』[27]においてリーウィウスと同様の問題を論究したが、かれは美徳（特に勇気）（ἀρετή）と幸運（τύχη）のどちらにも軍配を上げかねて、結論を出さないまま筆を擱いた。

しかし四世紀になると、ローマ人の優れた人間的資質を最重視する文人が現われた。歴史家アンミアーヌス＝マルケッリーヌス（Ammianus Marcellinus）である。かれはアンティオケイア生まれのギリシア人であったが、ローマのユーリアーヌス帝の親衛隊長として東方に転戦し、晩年はローマの都にあって、タキトゥス（Cornelius Tacitus）の

『歴史』を継ぐ九八年から三七八年までの『ローマ史』[28]を著わした。その第十四巻において、かれはわざわざ当面の叙述対象からそれて、興隆する共和政期のローマ人と衰退しつつある帝政末期のローマ人との比較を行なった。そしてかれは、世界帝国へと上昇する時期のローマ人が、質実剛健で富よりも名誉を求め、勇気を示し教養を重んじたことを述べ、かれらの美徳(virtus)と神々の与える幸運(fortuna)とが結合して永続的平和をもたらしたのだと解釈した。このように古代末期において既に、ローマ興隆の原因については、ローマ人の執った巧妙な政治的方策によるという見解と、ローマ人自身の持つ優れた人間的資質によるという見解とが、ふたつながら提起されていたのである。

さて当時の地中海世界全体をひとつの家にまとめ上げ、永遠不滅と信じられていたローマ帝国も、二世紀末に未開人の侵入と疫病の流行に痛めつけられて、徐々に傾き始めた。そして三、四世紀の皇帝らの幾度かの再建の努力も空しく、四世紀末には東西両帝国に決定的に分裂し、西半分の本来のローマ帝国は遂に五世紀末に滅亡した。六世紀に一旦東ローマ帝国のユスティーニアーヌス一世がイタリア半島の主権を回復するが、間もなくそれも失われ、そして(二十世紀のベルギーの史家アンリ＝ピレンヌの主張によれば)七世紀の後半にローマ文明それ自体も、ゲルマン人の未開な一派ランゴバルド人の南進と、イスラーム勢力の地中海進出によって完全に止めを刺されたのであった。[29]なるほど地中海世界の東北部では、この後も八百年にわたって東ローマ帝国がイスラーム勢力に抵抗し、いわゆるビザン

(26) Titus Livius; Ab urbe condita libri.『建国以来のローマ史』全一四二巻。ただし現存するのは第一巻から第十巻までと、第二一巻から第四五巻までの三五巻のみである。

(27) Πλουτάρχος; Περὶ τῆς Ῥωμαίων τύχης.

(28) Ammianus Marcellinus; Rerum Gestarum Libri. 全三一巻のうち、第十四巻以下が現存。盛衰原因の考察は第十四巻(Constantius et Gallus)の第六節(Senatus populusque Romani vitia)にある。

(29) 前掲の注(21)参照。

ツ文明を維持するが、この文明はローマ本来の文明とは異質的存在として扱う方が、妥当であると思われる。

この東ローマ帝国が遂にオスマン＝トルコ帝国によって引導を渡された十五世紀の中頃、西ヨーロッパ世界はすでに三百年前から新しい独自の文明を構築しつつあった。そして古代ローマ人を自己の遠祖と見なすイタリア人が、まず古典古代の文明の再発見に乗り出した。早くも十四世紀の初めに詩人ダンテ(Dante Alighieri)は、『神曲』の地獄篇と煉獄篇において、迷える自己を案内する導師として、ローマ最大の国民詩人ウェルギリウスを選んだ。この風潮に乗って、十六世紀前半の政治学者ニコッロ＝マキャヴェッリは、『ティトゥス＝リーウィウスの初編十巻に関する論述』[30]を著わし、ローマ共和国の初期の興隆原因を考察した。かれは第一巻においてポリュビオスの政体循環論とローマ混合政体優越論とに触れるが、それに留まることなく、第二巻においてかれ独自の理論を展開する。すなわち、およそ共和国が強大化するためには、三つの方策がある。第一はエトルスキー人のように多くの共和国が平等の同盟を結んで征服戦を進めることであり、第二はローマ人のように他国を同盟市とし、それに自国と同じ特権を与えながらもその支配権を掌握することであり、第三はスパルタ人やアテーナイ人のように他国を属領とすることである。この中、第一と第三の方策は征服の範囲が限定され、もし自国の力を超えて征服戦を試みるときは挫折する他はない。ただ第二の方策のみが大国となるのに適切な道であり、この方策はローマが出現するまで前例がなく、ローマが滅亡したのち追随者がなかった、という。かれの原因論は、ローマの巧妙な支配技術に最大の力点を置いていることで、アリステイデース説の継承と見做されるが、しかしその特異性を他の支配技術との比較対照において論じたという点で、政治学的に密度が高いと見てよい。なおかれはローマ人の人間的資質にも考察の矛先を向け、リーウィウスやプルータルコスのあの神秘的解釈を断乎として斥け、ローマ人の比類なき勇気と智謀を賞揚した。のちに『君主論』を著わして君主らに権謀術数を忌憚なく勧めるかれが、ローマ人の智謀を高く評価したのは理の当然と言えようが、し

かしローマ人が巧妙な支配技術を生み出した要因のひとつはかれらの類稀れな寛宏さにあると考えられるので、単にかれらの智謀にのみ帰するのは片手落ちというものであろう。ともあれ、かれのローマ人の資質重視は、二百年後に出るモンテスキュー(Montesquieu)に新しい道を開示し、かれによってその欠所を存分に補われることになる。

フランスの啓蒙思想家モンテスキューは、十八世紀の前半に『ローマ人盛衰原因論』[31]を著わして、この問題と真正面から取り組んだ。すでに『ペルシア人の手紙』において当時のヨーロッパの専制政治を論難し令名を得ていたかれは、ローマの歴史を扱うに当たっても同様の視点を堅持し、国民の自由を何よりも高く評価していたようである。すなわちローマの興隆は、共和政期の混合政体や支配体制によるよりも、むしろそれらを創始し維持したローマ人の偉大な人間的資質によるものであった。かれらは自由を愛好し規律を守り、剛勇を発揮し節制を重んじ、清貧を厭わず他者に寛宏である点で、いかなる民族にも引けを取らなかった。そして特に平民身分が貴族身分との長い闘争を経て政治的自由を勝ち取り、経済的にほぼ平等な財産を保証されたことが、かれらをして国家のため身命を賭して戦う勇気を与え、周辺民族を次々に征服する原動力となった、とかれは考えた。いかにも啓蒙思想家らしく、かれはここで自由と平等の理念を明確に打ち出している。それだけではない。かれはローマ人が他民族の優秀な武器を次々と積極的に採用して軍事的優位に立った事実に触れ、かれらの実用的技術の尊重という特質をも見事に洞察している。従来

(30) Machiavelli, Nicollò di Bernardo dei ; Discorsi sopra la prima deca di Tito Livio. 1531.（邦訳、『ローマ史論』、大岩誠訳、岩波文庫、一九四九―五〇年。　『政略論』、永井三明訳、「世界の名著」16巻所収、中央公論社、一九六六年。）第二巻の第一章と第四章に原因の考察がある。

(31) Montesquieu, Charles Louis de Secondat, Baron de la Brède et de ; Considérations sur les causes de la grandeur des romaines et de leur décadence. 1734.（邦訳、井上幸治訳、「世界の名著」28巻所収、中央公論社、一九七二年。　田中治男・栗田伸子訳、岩波文庫、一九八九年。）

かれの盛衰原因論に対しては、政治的軍事的考察のみで経済的社会的考察がないとの批判があるが、啓蒙思想期のかれに対してそれを要求するのは無い物ねだりと言うべきで、むしろわれわれはかれが、ローマの王政・共和政期から西ローマ帝国を貫いてさらに東ローマ帝国の滅亡に至るまで、実に二千数百年に及ぶローマの歴史全体を通観し、それを自由の理念から説明し尽くそうとしたその総括力に、敬意を表さねばなるまい。

モンテスキューから半世紀を経て、イギリスの歴史家エドワード＝ギボン（Edward Gibbon）が、あの不朽の名著『ローマ帝国衰亡史』[32]を世に送った。かれが取り扱ったのは、紀元二世紀のアントーニーヌス両帝から十五世紀の東ローマ帝国の滅亡までで、かれのローマ帝国概念はモンテスキューのそれと一致していることが明らかである。（ギボンについては衰亡原因論の箇所で考察する。）この名著の後を承けて、ローマの建国からギボンが起筆したアントーニーヌス帝時代までの『ローマ史』を叙述しようと思い立ったのが、十九世紀後半のドイツ人史家テオドール＝モムゼン（Theodor Mommsen）[33]である。かれは一八四八年以後の西欧の自由主義的風潮に身を委ねて、統一的な国民国家ドイツの建設と自由主義的な政治の実現を熱望し、その夢をローマ共和政の歴史に托した。従ってかれの描いたローマ共和国は、ローマ民族が人間性の最高の輝きを示し、国家の権力と市民の自由とを調和的に実現した理想的存在であった。しかしポエニ戦争後ローマが海外発展するにつれてこの調和は破れ、ローマ民族の堕落が始まったという。（この考え方は、王政・共和政期のローマ史を初めて文献学的方法によって実証的に構築したドイツ人史家ニーブール（Niebuhr）[34]に負うている。かれはイタリア半島内の農業国家であった前三世紀までのローマを理想的存在と見做し、カルターゴに勝って商業国家に転じた時点からローマの堕落が始まったと言う。）モムゼンの叙述はかれの主観的な政治理想の反映であって、これを興隆原因論の視点から検討することはいささか筋違いであるが、強いて言えばかれは、ローマ民族の烈々たる祖国愛と自由尊重の精神を、その原因と考えていたようである。そこには自由の理念

を賞揚したモンテスキューの影響も窺われるが、しかしモンテスキューが自由の精神の抑圧者としてカエサルを誹議しポンペーイユスやキケロに好意を示したのに対し、モムゼンはカエサルを洞察力のある偉大な改革者として持ち上げポンペーイユスとキケロを過小評価した。独裁者カエサルを自由の精神の体現者と見誤ったモムゼンは、共和政の終焉を以て叙述の筆を折り、遂にその『ローマ史』をアントーニーヌス両帝まで書き進めることができないままで終った。

これ以後、格別に新奇な興隆原因論は見当らないようである。二十世紀の西ヨーロッパで衰亡原因論が活潑に取沙汰されたことに較べると、これは一見奇妙な現象のようであるが、おそらく第一次大戦以後、西欧文明の没落のみが念頭にある知識人にとって、興隆原因論はも早や興味の的でなかったのかも知れないし、あるいは興隆原因論については十分に語り尽くされたという衆人の黙契があったのかも知れない。

以上、時代を追って概述してきた興隆原因論を要約してみると、大体次のようになる。

㈠　神秘的原因論――神々の恵む幸運によるとするもの。（ティトゥス＝リーウィウス、プルータルコス。）

㈡　政治的原因論――ローマ人の採用した優れた政治組織や対外政策によるとするもの。（ポリュビオス、アイリオス＝アリステイデース、マキャヴェッリ。）

---

(32) Gibbon, Edward ; The Decline and Fall of the Roman Empire. 6 vols. 1776～88.（邦訳、村山勇三訳、岩波文庫、一九五一―五九年。　未完訳、中野好夫・朱牟田夏雄・中野好之訳、筑摩書房、一九七六年―。）

(33) Mommsen, Theodor ; Römische Geschichte. Bde. I～Ⅲ. 1854–56. Bd. V. 1885.（抄訳、長谷川博隆訳、「ノーベル賞文学全集」21巻所収、主婦之友社、一九七二年。）

(34) Niebuhr, Barthold Georg ; Römische Geschichte. Bde. I～Ⅲ. 1811–12. Bd.Ⅲ. 1832.

㈢　人間的原因論――ローマ人の具備する優れた人間的資質によるとするもの。（勇気・規律・敬虔などの美徳による――ポリュビオス、アンミアーヌス＝マルケッリーヌス、マキャヴェッリ、モンテスキュー。自由への愛好心による――モンテスキュー、モムゼン。）

これらの原因論の中、㈠は学問の範疇外にあるので度外視する。残る所の㈡と㈢を考察すると、古代から近代初頭にかけては偉大な歴史家ポリュビオスの影響によって政治的原因論が優勢であり、近代以降においては啓蒙思想の感化によって人間的原因論が有力となったと言えよう。その人間的原因としては、勇気・節制・規律・敬虔・寛宏・智謀・質朴などの美徳と自由への愛好心とが、重視されているようである。もちろんそれはそれで正しい指摘であるが、筆者はローマ文明の担い手であるローマ人と、現在年を追って明らかになりつつある他の諸文明の担い手である諸民族との特質を比較考量してみるとき、ローマ人を興隆させた特質として、実用的技術の重視と宗教・思想上の寛容とを付け加えたいと考える。この点に関しては、第三章において詳述するつもりである。それでは次に衰退原因論について見ておこう。

第二節　衰退原因論

まず紀元一世紀の初め、あの哲人セネカの父である修辞学者大セネカ(Marcus Annaeus Seneca)が、今やローマは老年に達し、あとは死を待つほかはないという悲観論を述べ、詩人ホラーティウス(Flaccus Horatius)らもこれに同調したが、しかしこれは文人の単なる直覚的観照に過ぎず、そこには何の学問的根拠もなかった。従って本格的な衰退原因論が現われるのは、当然のことながら、ローマ帝国が衰退期にはいって、も早やその頽勢を挽回し得ないこ

とが何人の目にも明らかとなった四世紀の末葉のことである。前述したように、ギリシア生まれの歴史家アンミアーヌス＝マルケッリーヌスは、その『ローマ史』第十四巻において、興隆する共和政期のローマ人と比較して、衰退しつつあるローマ人の現況をつぶさに観察した。すなわち往古のローマ人が質実剛健で富よりも名誉を求め、勇気を振るってあらゆる障碍を克服したのに対し、現時のローマ人は奢侈の風に馴れ、道徳的に退廃し、酒場や劇場や戦車競技場で遊興に日を送っているという。特に貴族は広大な土地を所有し、衣裳道楽や飽食の饗宴にうつつを抜かし、大通りを馬車や駕籠に乗って疾駆し、教養人や外国人を追放して踊子や合唱隊を養い、自身の虚栄のため彫像を建立しているという。アンミアーヌスにとって、あの光栄あるローマが留めどもなく老年期への坂を転げ落ちて行くのは、ローマ人全体の奢侈と道徳的退廃のせいであった。

かれが仕えた皇帝ユーリアーヌスは、キリスト教信仰を捨てローマの伝統的宗教に復帰して国家の救済を図ったが、ササン朝ペルシアと戦って利あらず、最期に「ガリラヤ人よ、汝は勝てり。」という言葉を残して陣没したという。キリスト教徒から「背教者(Apostatus)」と誹られたこの皇帝の死後、キリスト教の勢力は一段と躍進し、三九二年にテオドシウス一世の勅令によって唯一の国教の地位を得た。しかし間もなくイタリア本土へのゲルマン民族の侵入が始まる。四一〇年に永遠の都ローマは、西ゴート族の王アラリークス(Alaricus)によって劫掠された。伝統的宗教派（キリスト教会はかれらを「異教徒」と呼んだが、この言葉は歴史用語として不適当である）の貴族たちは、ローマの受難が祖先伝来の守護神を擯斥した当然の報いであるとして、キリスト教を攻撃した。この攻撃に応えて護教神学の書『神国論』を著わしたのが、ヌミディア（北アフリカ）生まれのラテン教父アウグスティーヌス(Augustinus)[35]であ

(35) Augustinus, Aurelius; De civitate Dei. 413-26.（邦訳、『神の国』、服部英次郎・藤本雄三訳、岩波文庫、一九八二―八六年、未完。）かれの没落原因論は、主に第二巻と第十九巻に述べられている。

る。かれはローマ帝国を没落させる原因が、正に「ローマの支配」そのものの中にあると見た。すなわち「ローマの支配」は神からの離反の罪を犯している。それは自己愛（amor sui）・支配欲（libido dominandi）・名誉欲（cupido gloriae）の所産であって、いわば「悪魔の国（civitas diaboli）」である故に、破滅の運命に定められているのである。これに対し天上における「神の国（civitas dei）」は、キリスト信徒が永遠に望むべき聖なる共同体である。この「神の国」における最高善は永遠の生命における「天上の平和（pax caelestis）」であって、支配と服従の関係に基づく「地上の平和（pax terrena）」はその影であるに過ぎない、という。この解釈に従えば、人類の至福の時代と考えられた「ローマの平和（pax Romana）」でさえも非倫理的で無価値な「地上の平和」であって、ただ「神の国」に属するキリスト信徒らが「天上の平和」を望む限りにおいてのみ価値を有することになる。かれの立論は常識的な人間の立場を崩し、視点を神の高みに据えて人間の歴史を批判した神学的もしくは形而上学的解釈であって、われわれはこの主観的判断を実証的な歴史の分野に持ち込むことを差控えねばなるまい。

しかしながら、当時の西洋世界に類のないこの大帝国・大文明が、未開人の侵入に曝されて没落して行く悲惨な状況を目のあたりに見て、深い思索を促されたかれは、人類の歴史を神の意志の顕現として把握し、人類の創造から最後の審判に至る人類の運命を、進行する直線的体系として構想した。中国人やインド人が歴史を無限の反覆や回帰と考えたのに対して、かれの独創的な直線史観は近代ヨーロッパ人の発展史観の基礎ともなった。もしローマ文明が没落して行かなかったならば、アウグスティーヌスは直線的人類史観を考えつかなかったかも知れず、またもしアウグスティーヌスが『神国論』を書かなかったならば、ヘーゲルの発展史観もマルクスの発展段階説も出現しなかったかも知れない。

さて近代に至って、衰亡原因論をまともに取り上げたのは、前述のモンテスキューである。かれの論述は具体的史

実の豊富な積み重ねであって、その堆積の中から主要な論旨を捜し出すことは、必ずしも容易でない。しかしかれは、あらゆる君主国には、それを興隆させ維持しあるいは没落させる精神的物質的な一般的原因があり、個々の偶発的事件によってそうなるのではないと考えていた。かれの言う一般的原因とは、この場合何を指すのであろうか。前述したように、共和政期のローマ人は自由への愛好心と規律・勇気・節制・清貧・寛宏さなどの美徳において優れ、特に平民が政治的自由と経済的平等を獲得したことが、かれらを駆って周辺諸民族を征服する結果をもたらした。しかし地中海世界全域に及ぶ大帝国を完成したとき、共和国の自由の体制は帝国に適合せず、当然のことながら帝国統治にふさわしい秩序と隷属の体制に改められた。この自由の喪失がローマ人の道徳的退廃を招き、帝国は不可避的に没落への道を辿り始めた。それでもなお歴代の皇帝の努力によって軍事的技術のみは生き残り、なお二百年帝国の命脈を繋ぎ留めたが、軍隊の中にまで道徳的退廃が浸透したとき、帝国は崩壊したのであると。要するに、自由の獲得が共和政ローマを興隆させ、自由の喪失が帝政ローマを衰亡させたというのが、かれの提示する一般的原因であったと思われる。これはアンミアーヌス＝マルケッリーヌス流の道徳論的原因論でもなければアウグスティーヌス流の神学的原因論でもなく、啓蒙時代の知識人の理性的要求に応えうる哲学的理念的原因論であったと言ってよい。

この半年後、エドワード＝ギボンが『ローマ帝国衰亡史』を江湖の読者に贈ったが、この『衰亡史』にはモンテスキューの強い影響が窺われる。まず第一にかれは西ローマ帝国の滅亡を以て叙述の筆を留めず、なおも一千年、細々と継続する東ローマ帝国の足跡を追い続けた。（文明論の見地よりすれば、東ローマ帝国がローマ文明と異質のビザンツ文明であることは前述した通りである。）第二にかれの衰亡原因論には、モンテスキューの言う一般的原因が追究されている。すなわちギボンは、西ローマ帝国の滅亡を叙したのち、第三八章に「西ローマ帝国崩壊の総括」なる一節を付して、衰亡原因を考察した。かれによれば、「ローマの衰退は過度の偉大さの避け難い結果であって、繁栄が衰

退の原理を成熟させ、征服の拡大が破滅の原因を倍加させた。ために巨大な帝国の骨組は、それ自体の重みに耐え切れず崩壊した」というのである。これは一見すると運命論のように思われるが、そうではなく、必然的不可避的な一般原因の考察である。合衆国の現代のローマ史家ウォールバンク(Walbank)[36]は、この見解を従来の「循環論的、神秘的、生物学的、形而上学的解釈と訣別した自然主義的解釈」であると賞揚し、要するにローマ帝国は古代社会の全体構造が外部的圧力に抵抗し切れなかったから衰亡した、というのがギボンの見解だと付記している。恐らく「衰退の原理」とは市民の退廃、自由の消滅などの内部的原因を指し、「破滅の原因」とは未開人の侵入という外部的原因を指すのであろう。（内外の両原因が相い俟って西ローマ帝国を滅亡させたことや、未開人の侵入が帝国滅亡の重大な原因であったことを、初めて指摘したのは、かれより一世代早い啓蒙思想家ヴォルテールだったようである。）

しかしギボンは、単に衰亡原因の探究に留まらず、それと同じ原因が西欧文明を滅ぼすこともあり得るかという比較文明学的設問を行なった点で、先駆者と言わねばならない。かれは西欧諸国とその植民地を、美術・法律・習慣などの在り方において、他の人類をぬきん出た幸福な状態にあると認識し、これら文明社会の共通の敵である未開野蛮な民族が西欧諸国に侵入してこれを覆滅する可能性があるかどうかについては、種々の否定的論証を用いて、あり得ぬことと断定した。かれもまた理性の勝利を無邪気に信じていた啓蒙時代の申し子であった。しかしこの楽観的予測が二十世紀には両度の世界大戦によって無惨にも打ち砕かれ、西欧文明が内外両面の諸原因によって西ローマ帝国同様の衰亡の危機に見舞われていることは周知の事実である。

従って今世紀の初頭以来西欧では、現実的関心に促されてローマ帝国の衰亡原因を考察する歴史家が、引きもきらず現われることになった。この問題に関しては、モーティマー＝チェインバーズが編集した『ローマ帝国の没落』[37]という便利な文献集があるので、詳細はそれに譲ることにして、その要点のみを整理して記せば、次の通りである。（括

弧内は私見。）

(一) 政治的原因論――特定の皇帝の採った政策上の過誤が、帝国の運命にとって致命傷になったという説。グリエルモ＝フェッレーロ(Guglielmo Ferrero)[38]は、皇帝マルクス＝アウレーリウスが元老院の定めた候補者を無視して不肖の息子コンモドゥスに譲位し、帝国の全構造の基礎である元老院の権威を失墜させたためであると論じた。しかし一皇帝の元老院無視が、帝国の以後の運命にそれほど致命的影響を及ぼしたと考えるのは不自然である。また、W＝E＝ヘイトランド(W. E. Heitland)[39]は、帝国が大衆を政治組織から排除して行き、遂に四世紀には皇帝自身とその側近である宮廷官僚のみが政治を専行したためであると言った。しかし当時帝国が、かりに大衆参加の代議政体を創始していたとしても、宮廷政治よりも有効に国家を維持し得たとは思われないので、これも空論である。また、エルンスト＝コルネマン(Ernst Kornemann)[40]は、アウグストゥスが帝国の軍隊を（三〇箇軍団に）縮小し、この軍制を後継皇帝たちが忠実に継承して行ったため、未開人の侵入という新しい現実に対応し切れなかったのだと

(36) Walbank, F. W.; The Decline of the Roman Empire in the West. 1946.（邦訳、『ローマ帝国衰亡史』、吉村忠典訳、岩波書店、一九六三年。）ここでウォールバンクが言う「循環論的」とは恐らくポリュビオス流の解釈を指し、「神秘的」とはティトゥス＝リーウィウスやプルータルコス流の、「生物学的」とはアンミアーヌス＝マルケッリーヌス流の、また「形而上学的」とはアウグスティーヌス流の解釈を指すものと思われる。

(37) Chambers, Mortimer (ed.); The Fall of Rome, Can it be Explained?（邦訳、『ローマ帝国の没落』、弓削達訳、創文社、一九七三年。）

(38) Ferrero, Guglielmo; Der Untergang der Zivilization des Altertums. 1922.

(39) Heitland, W. E.; The Roman Fate. 1922.

(40) Kornemann, Ernst; Römische Geschichte. Bde. 2. 1938–39.

主張する。しかし、小規模軍団の維持は、後継皇帝たちの保守性によるよりも、帝国経済の負担能力によるものであって、皇帝たちの責任ではない。（要するに政治的原因論は、いずれも史実的に十分の説得力がなく、現在では顧みられない。）

(二) 自然的原因論――風土・気候などの自然的条件の劣悪化が原因であるという説。ウラジーミル＝シムコーヴィッチ（Vladimir Simkhovitch）[41]は、ローマ人の農業耕作の失敗により、イタリア初め諸属州の農耕地の地力が消耗し、不毛地に変って、生産力が衰えたためと言う。しかし地力消耗は特定の属州で見られたのみで、しかもローマ官憲の重税政策の結果であることが多かった。また、エルズワース＝ハンティントン（Ellsworth Huntington）[42]は、紀元後二世紀から五世紀まで気候が悪化し、雨量が減小して土地は荒廃し、マラリアが蔓延したためだと主張した。しかしかれの気候悪化の根拠は、樹木の年輪の様相から推定したもので、方法論的に正しいとは言い切れず、しかも気候悪化の事実は局地的現象であって、これを帝国領全体に拡大するのは行き過ぎであるとして斥けられた。（しかし自然破壊や世界全体の気候異変が問題化している今日、これらの説は見直される傾向にある。）

(三) 人間的原因論――ローマ民族の精神的肉体的退化や人口減小が原因であるという説。テニイ＝フランク（Tenny Frank）[43]は東方の諸属州から流入したギリシア人やオリエント人の奴隷たちが解放されてローマ市民権を得た結果、ローマ市民団の性格が変ってローマ人本来の優秀性が失われたためと言う。しかしローマよりも先進国である東方諸国から敗戦国民としてローマへ連行された奴隷たちの素質は比較的優秀であって、かれらの参入がローマ市民団の劣悪化を助長したとは考えにくい。またオットー＝ゼーク（Otto Seeck）[44]は紀元三世紀の皇帝たちが才能ある個人の根絶を図ってかれらを萎縮させた結果、市民間の奴隷根性を助長し、キリスト教という「乞食の宗教」をはびこらせて、帝国の独創性を失わせたためと言う。しかし、四世紀にもなお才能ある傑物が輩出した事実を見れば、

三世紀の皇帝たちの施策の罪に帰するのはあらぬ言いがかりというものである。またマーティン＝ニルソン(Martin Nilsson)[45]はローマ人の出生率が低下し未開人の人口比率が増大した結果、混血児が殖えてローマ市民全体の質的退化を招いたと主張する。しかし混血児の素質を不良ときめつけることは、人種的偏見に過ぎないことが多い。（というようなわけで、以上の諸説に同調する者は、現在ではまず見当らない。）

戦後の新説には、アーサー＝ボークやコラム＝ギルフィランの説がある。アーサー＝ボーク(Arthur Boak)[46]は、二世紀後半から三世紀後半にかけて、戦争が頻発し疫病が流行したため、人口が著しく減小し、その結果農村では生産が減退し、軍隊では兵員の素質低下を招き、未開人の大規模な侵入を防ぎ切れなかったのだと言う。（この説は帝国東半部については妥当しないが、西半部については事実と見られ、相当な説得力がある。）またコラム＝ギルフィラン(Colum Gilfillan)[47]は、文明生活が普及するにつれて、鉛製の水道管・食器、鉛の混入した化粧品・医薬

(41) Simkhovitch, Vladimir; Rome's Fall Reconsidered. 1916.

(42) Huntington, Ellsworth; Climatic Change and Agricultural Exhaustion as Elements in the Fall of Rome. 1917.ハンティントン説の再評価については、例えば、Sears, Paul B.; Where There Is Life. An Introduction to Ecology. 1970.（邦訳『エコロジー入門』、柳田為正訳、講談社、現代新書、一九七二年。）

(43) Frank, Tenny; An Economic History of Rome. 1927.

(44) Seeck, Otto; Geschichte des Untergangs der antiken Welt. 1921.

(45) Nilsson, Martin P.; Imperial Rome. 1926.

(46) Boak, Arthur E. R.; Manpower Shortage and the Fall of the Roman Empire in the West. 1955.

(47) Gilfillan, S. Colum; Technology and Culture. 1962–63. ギルフィラン説の再評価については、金子史朗著『ポンペイの滅んだ日』（原書房、一九八八年。）を参照のこと。

品・塗料などが乱用された結果、ローマ市民、とりわけその選良層が鉛中毒によって痛風や精神病に犯され、肉体的に退化したためと主張する。（この説は、最近の考古学発掘によって実際の裏付けを得つつあり、環境汚染が世界的規模で問題となっている現実とも相い俟って、無視することができない。）

(四) 社会的・経済的原因論――社会構造の変動や、その結果たる経済的変化が原因であるという説。ロシヤ人で、のちアメリカへ亡命し帰化したミカエル＝ロストフツェフ(Michael I. Rostovtzeff)は、その名著『ローマ帝国社会経済史』[48]において、初めてこの種の考察を行なった。すなわち、ローマは地中海西部へ征服を進めるとき都市の発達を促し、都市は農村から富を収奪することによって繁栄したため、農民階級は都市住民と激しく反目した。帝国の平和が永続すると、都市住民は軍隊生活に適応できなくなり、三世紀以降、兵員は主に農村から補充されるようになった。そして次第に辺境地方の農村のゲルマン人が属州の貴族階級に代わって軍人や官僚となり、帝国領土内へ大量に移住してきた。かれらは農村地帯の農民階級と共同戦線を張って都市住民と鋭く対立した。その結果兵農共同戦線の農村的未開性がローマ都市文明を衰弱させ、遂にこれを滅亡させたのであるという。（この説は、マルクス的階級闘争史観で以て、ローマ文明の衰亡を社会経済面から説き明かそうとした画期的主張であると言える。）しかしノーマン＝H＝ベインズ(Norman H. Baynes)[49]は、古代において都市と農村間に階級的対立が存在しなかったことや、ローマ人の農民も都市住民と同じくゲルマン人を主体とする軍隊を怖れていて同盟するどころではなかった事実を述べ、要するにロストフツェフの主張は、かれが体験したロシヤ革命の実態をローマ文明の運命に投影したものに過ぎないと見做している。

次に、エドワード＝T＝サーモン(Edward T. Salmon)[50]は、三世紀初めのカラカッラ帝の勅法が、帝国内の全自由民にローマ市民権を賦与したことが原因であると言う。すなわち、それまでは属州の中産階級以上の優良な子弟

がローマ市民権を得て階級上昇するために、軍団の補助軍に志願して軍人となったが、この勅法以後はそのような動機が消滅したために軍人志願者が払底し、その結果軍団は辺境地帯の農村出身の強盗まがいの連中で占められ、帝国防衛の任に堪えられなくなったのだと論じた。（この説は衰亡原因のひとつとしては、首肯性がある。）

最後に、前掲のウォールバンクは、『西ローマ帝国の衰退』[51]において、帝国の「組合国家」への変貌が原因であると述べている。三世紀末のアウレーリアーヌス皇帝以後、とりわけ四世紀の諸皇帝は、帝国のための労働力の確保に腐心し、あらゆる職種を政府の厳重な統制のもとに置いて、これに重い負担を負わせた。いわばムッソリーニ流の「組合国家」である。その結果、国家の統制を嫌う、活力ある有能な市民は、地方の大所有地へ逃避して荘園経済を発展させ、帝国経済そのものを崩壊させて行ったという。（この説も一応の説得力を有している。）

さて以上述べてきた衰退原因論を、整理してみると次のようになる。

(一) 神学的原因論――神意によって、本来滅びに定められていたとするもの。（アウグスティーヌス。かれの後に出たラテン教父オロシウス(Orosius)やヒエローニュムス(Hieronymus)もこの説に従った。）

(二) 政治的原因論――受動的原因(a)と能動的原因(b)とがある。

(a) 未開人の侵入によるとするもの。（ヴォルテール、ギボン。）

(b) 皇帝たちの施策の誤りによるとするもの。（フェッレーロ、ヘイトランド、コルネマン。）

---

(48) Rostovtzeff, M. I.; The Social and Economic History of the Roman Empire. 1926.

(49) Baynes, Norman H.; The Decline of the Roman Power in the Western Europe. Some Modern Explanation. 1943.

(50) Salmon, Edward T.「ローマの軍隊とローマ帝国の解体」、一九五六年。（原語不詳）

(51) 前掲の注（36）参照。

㈢　自然的原因論――風土・気候など自然環境の劣悪化によるとするもの。（シムコーヴィッチ、ハンティントン。）

㈣　人間的原因論――精神的原因(a)と肉体的原因(b)と生物的原因(c)とがある。

(a)　理念の喪失によるとするもの。（自由の喪失―モンテスキュー。奴隷根性―ゼーク。）

(b)　ローマ人の質的退化によるとするもの。（フランク、ニルソン、ギルフィラン。）

(c)　人口の減小によるとするもの。（ボーク。）

㈤　社会的経済的原因論――社会構造の変動や経済的変化によるとするもの。（ロストフツェフ、ウォールバンク。）

これらの中、㈠の神学的原因論は、実証性を持たない一種の形而上学であるから、比較文明学の範疇外にあると見なして外すことにする。㈡の政治的原因論の中、(a)受動的原因（未開人の侵入）は極めて重大な要因と考えられる。なぜなら、たとえローマ社会が内部的に腐敗し脆弱化していても、未開人の侵入がなければ、なお何世紀か持ちこたえたであろうから。（実はアウグスティーヌスの神学的原因論も、ゴート族の侵入をローマ人に対する神の裁きの現われと見做しているので、この政治的原因論の間接的表現であると言ってよい。）一方、(b)能動的原因（為政者の失敗）は、ほとんど問題とするに足りない。興隆原因論の場合には、能動的原因（巧妙な対外政策）が有力な要因であったことを想起するならば、共和政期と帝政期との条件の相違は極めて著しい。おそらく巨大化した帝国の衰亡は、一部の人間の努力や一時的な弥縫策で以て救済することのできない、複雑な現象だったということであろう。㈢の自然的原因論は、発表当初は風当りが強く、奇抜な愚論として退けられたが、最近では、生態学上の異常現象が地球的規模で問題視される世情を反映して、その正当性を再評価されつつある。㈣の人間的原因論は(a)(b)(c)のいずれも、全部的または部分的に妥当性があると考えられる。興隆原因論の場合には最大の要因として認められたこの人間的原因論は、衰亡原因論の場合にもやはり同様の評価を与えられるべきであろう。最後に㈤の社会的経済的原因論も、それぞ

れに重要な因子として首肯できる。

以上を整理すると、月並みながら次のような結論が出る。ローマ帝国は、ローマ人自体の質的劣化と自然環境の悪化とのため、致命的な社会・経済的変化を蒙り、内部的に混乱したあげく、外部から未開人の度重なる侵入を受けて崩壊した。その後、強力な国家主権の不在のままに社会は衰退し、最後に文化程度の低い未開人の支配が、ローマ文明そのものをも葬り去ってしまった、ということになろう。いかにもこの結論は月並みであるが、そこに多くの問題点が含まれている。それらの問題点を、第三章において取り上げてみよう。

（続く）

追記。

先般、比較文明学会の要請で、学会誌『比較文明』第六号（一九九〇年刊）に拙論「ローマ文明の世界史的意義」を掲載したが、枚数の制限のため草稿を大幅に縮小せざるを得ず、甚だ意に満たないものになった。従って本意を遂げるために、元の草稿に若干加筆して、まとめ上げたのが本稿である。諒とされたい。